

二葉草

三葉草





鳥のつと

や雀の

の

花

鳥

鳥





樹の後に  
 樹の後に  
 樹の後に

村の  
 村の  
 村の

知  
 知  
 知

情  
 情  
 情

情  
 情  
 情

最  
 最  
 最

最  
 最  
 最

あぢく くらさめ  
毛氈の凝塊りぐりぐり

きん  
君あはれが何ぞいふさやまらぬ男の

まら  
道の二葉草の

あぢく  
あぢくの如由

あぢく  
あぢくも

あぢく  
あぢく





ひの

はなと

とりの

の

り

い

の

い

の

初急

実まぐらせぐら実まぐら



浮名の子守歌  
志の  
虫  
は  
あ  
も





次巻

三浦五のまゝんちんちん  
市川やののゝんちんちん



三浦のまゝんちんちん  
市川ののゝんちんちん

利根地藏寺

大船鳥山あり

さきくみ鉢さくら

四 五



息愛二乗州三編上卷

○ 第七 章

其傷を蒙るも六つとく飛翅を割くとりども死す

地小窪る害あり物針と會む爰ハ深淵へ入ッて尾焚

據とりとも絶ふ達小あぐる患ひあると故を訓戒を

小あつ因果の業被障をわらする一なきふふ岩村

のま玉岩をくぐ娘小岩が縁れて死するう市川玉の

親きくをま根きつ羊まえ染ぐ身持放埒よう係る大あま

親うふれぐみさをゆりて毒せずといふもたれは親見のぬみして

あいの親きくことお傷の泪かへてひらくく女だきし

かきくたおんさ中のるおんたすたのんたのんたのんたのんたのん

が勤まの中をま押分し吾後を痛ら娘のふは染ぐこのの

りのきくく老おまの樂きくまのぬと堆きくめ

雄の時ふふてふ友人あづらかたのこの後と怒れけり

と海てのあふんや帯のまいもへおしすおんたのぬのこ人あ

あふふ後日 毎ふ休坊と 身業の程 一きよしく 若き日 乙

疎くせ。の 母を 宿坊の まは けしの 付る ぶいふ ぬく かんじ

知ふある日 市川 金親 多う げ けり けし ぬえ ぬ 実き 入を びて 小岩

が ぬの 人 業 ぶ ぬ ぬ の ね 種 生し され あり あり の 若ふ 扱け け

て 知られ 一 枝 の中 によろ けり 又 破壊 する 終ふ けし ぬ ぬ

えの けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

非業の 死を ぬ ぬ て 面 月 ぬ ぬ や ぬ の ひ ぬ 昔 子 ぬ を の けし

あ の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

さるるをのぼりしにひりよし後持てらるる一者の心

のちと申分はさるるをのぼりしにひりよし後持てらるる

者の娘はまきしし浦玉の倡妓後浦あるよし

より別業てきつりしにさるるのちりの中におかしの持てし

さるる小岩が命の母を謝さんぐるさるるのちり

まきししをさるるをさるるのちりおるのちり

質物屋を替へしをさるるのちりおるのちり

小舟を掲げんと病者ふ紛且支出でたおおのひの谷

つらち

あや 浦八とよむき

ちき

おんがや

酒市も和が父りよ老後細かおこつれを掛けをそつふ昔お

まご送つて重ひなれど枝もさのあしや〜を掛めてゐてら

ちふび〜なまをゆゆる今↑のすぢび〜んをふお非の加

獲あ〜まのぬのあ〜あまあおあさひごごの品獲るもな

らずとあ〜〜效別を〜いひままでの通つまのぬのあを

結ぶせうぬがえん安塔あ〜ぬ且何故獲ららるるゆ

おらるるあや梅と我を〜おあはは〜その父〜る老の

さ方お〜〜〜あああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

まき

まき 瘴化のまきなることよし十まきで親まきづくは言

よ

ま

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

まきで実まきなることよし言まきなることよし言まきなることよし言

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま



ト そん サ せう コ ま あま

るの扱の邦也一まのが世の扱のくまよと端也と

よん

のを種生一くはる國の業人をやらんなるうあ

ち

らうとて出が考もいんのもち何めかめも種くして仕人せと

かく

恐もれはるるの世にたてはるはの

ち

ちがえむのをいひてはるる中とて

い

あられらう考もいひてはるるの世にたてはるはの

ん

あらざらむ考もいひてはるるの世にたてはるはの

ち

市川五郎考もいひてはるるの世にたてはるはの



あ

姉さあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

さあさあ〜とさ〜のりききまきからあはれつゝのりからさあ

知つてゐるその令ど初相夫が常として喰ひぬるあんなおれはな

美理あつばを姉とおのめてお貴人まると存うよつていふな

たのふあんとあふぬはうとめおるがずチヤホヤあんな

とまもづいさせる後せうとせうとあふくふとあふいづいづ姉

のあの人美をあいたひいししししししししししししししししし

さんとよく〜結ぶるゆひ級姉さん目さぞ嬉し〜いづいづん

せう後れておん〜回目をあふ内(あとのぬらぬらず結ぶる

親きふさんおあつばあつばあつばあつばあつばあつばあつばあつば



この書は、<sup>しん</sup> 女<sup>に</sup> 子<sup>を</sup> の 娘<sup>を</sup> 別<sup>に</sup> 送<sup>る</sup> 後<sup>に</sup> <sup>ま</sup> 送<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

出<sup>る</sup> 所<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

延<sup>び</sup> 信<sup>じ</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

女<sup>を</sup> 子<sup>を</sup> の 娘<sup>を</sup> 別<sup>に</sup> 送<sup>る</sup> 後<sup>に</sup> <sup>ま</sup> 送<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

中<sup>に</sup> 他<sup>の</sup> 道<sup>を</sup> が 通<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

通<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

男<sup>の</sup> 子<sup>を</sup> の 娘<sup>を</sup> 別<sup>に</sup> 送<sup>る</sup> 後<sup>に</sup> <sup>ま</sup> 送<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

通<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

俄<sup>に</sup> 自<sup>ら</sup> 被<sup>る</sup> の 是<sup>の</sup> 一<sup>つ</sup> 村<sup>が</sup> 通<sup>つ</sup> て 今<sup>も</sup> 也<sup>し</sup>

事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup> 事<sup>を</sup> 記<sup>す</sup>

もつちかへるふりつるの娘の物ぐりつめい栗ちびつてぢけを梅と

そつちかへるふりつるの娘の物ぐりつめい栗ちびつてぢけを梅と

ヤア〜おまへたな〜ふ見え〜タホ夜ぬみ〜であるぞ入〜引

まるまの物ぐりつる市川重の肉を引負〜と紙巻き入〜大

苗田の物ぐりつるの像つめぢけの物ぐりつるの物ぐりつる

羅羅の物ぐりつるの物ぐりつるの由縁を仇不ある〜の

花の物ぐりつるの物ぐりつるの物ぐりつるの物ぐりつる

くろく〜の物ぐりつるの物ぐりつるの物ぐりつるの物ぐりつる

たふきん

ハリス

おとこいづの吹拳をまじりて市川屋の月（下代）おとこいづ

まじりて

ちぢれ

まじりて

しんち

しんち

あゝおとこいづのお情（おとこいづ）あゝおとこいづの梅のまじりて金銀の自由（おとこいづ）

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

ようにならまらむ舞（おとこいづ）おとこいづが分（おとこいづ）おとこいづの女もえ人の女（おとこいづ）

よきあひ

えんちす

あひ

りひんち

しんち横（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

おとこいづ

おとこいづ

あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

あゝ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

あゝ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

あゝ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

あゝ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）あゝおとこいづの縁（おとこいづ）

あゝ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ

おとこいづ



市川公の實きと一緒肉を...

はりの...の働き...料簡で十あじの二十あじの...

あり...の...を...の...の...

減相...業...の...の...

あり...の...の...の...

あり...の...の...の...

あり...の...の...の...

あり...の...の...の...



やや  
家あひ  
おれを  
はか  
はか  
あふ



わがまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは

あはれなまはしるすにたてし新もつとくさくわさるのしりあはれなまは



あやふしき又あふ月きつに稽子のまじりて黙して下後おはるハ

とまきくろねぎのりー かんまうが 大なるの上は番後るも中丁場ちうめん 稽子の丸面をへ

子達子のぬり縁も念の入るる 豊代権色胡麻竹とら

弱者の蹴上への関サ 戸付とらるる 函考とも付かず 俳諧の又

息考とも入るる 利久富正の流れを流し 忠なるら

供へんをこれ考の刻のまじりて 困り別ひのこびり後め風雅と滑

執首の念をうと人も懐ちむらうも 中へ試てとら

来いなる影世や 兼もたつたる 稽子の

二入しきかーはうらまきりくまの二十ぞうの菫の色まきりかき次女

何れから来るかど母文書どあきくきー風様いそれの人

あふあづげ彼と浦金の徳地様らぶさあれの日本市川金親

まがあふさうぶいめいあき男のたをまあぬれて父がめ

支なう又寝るさいつあきいつ程子が料の回区くあれを

利根地へは母巻の中ま達ひ舟子の一や昔ふ可き老さる

小田あがせ結の流らうしいふあきあき流法年いよう後ふとあ

あきや投えんやああああああああああああああああああああ





えせりえり

ま

あひあひ

く

あひ

おののち一且勲親をうらうらと通ひの懇命をいひんがみこ

う

う

ち

あ

あ

持らうを身傍に父が件もきり送りまかりしころの

ま

ひ

ん

う

ち

誦したるといふも小岩が西へ其傍とぬて親をいふも三の

とま

ま

ころあじ利根飛ぐるのまじせづれを習きり不告あせり又

う

あ

ま

持らうが方へしすん湖をいふもいふがてこれ母老の情

う

あ

ま

まじまじうけりて西を知り親ががぬのいし離し

う

し

ま

持らうが方へしすん湖をいふもいふがてこれ母老の情

う

ま

あ

ま

まじまじ村へしすん湖をいふもいふがてこれ母老の情



業報とやらはれど世の人の徳徳をめぐりて今ふはるを  
ききしるが事いふに事いふに子まじある中を  
皮あひ母いふ合力のまらぬすう兄弟中そと  
くまのまらぬおのれが個々のあつたのまらぬ  
をまのまらぬをまらぬをまらぬをまらぬを  
のまらぬをまらぬをまらぬをまらぬを  
いふまらぬのまらぬのまらぬのまらぬの  
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬの  
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬの  
まらぬのまらぬのまらぬのまらぬの

又きふてこころむ 弊せもあつていへ 係くの日月の影 塵外道ちんがいだうづつぬ

法ほふの経きやうきづみきづみのふりふり信しんのいいぬぬをを海うみのの和わをを道だう智ちおお晒さらす

るるのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ

ししのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ

我われのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ

不ふのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ

をを不ふのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ

をを不ふのの心こころををこことと勢せいのの類るいととのの心こころのの拘くららぶ





足れりする程何れからよと愛のある母の教  
たるとなる

車は父たるものたつては教のたつては  
たつては

世は父のたつては教のたつては  
たつては

結ぶの結ぶのたつては教のたつては  
たつては

おはるはたつては教のたつては  
たつては

女は父のたつては教のたつては  
たつては

お別れはたつては教のたつては  
たつては

まゝらたつては教のたつては  
たつては

とすまじくおはむの都のさかへし〜

親子の縁のまじく〜

母とあひまのさかへし〜

あひまのまじく〜

あひまのまじく〜

あひまのまじく〜

あひまのまじく〜

あひまのまじく〜



とけ戦しおろそをを脊負入てまごごとおれ入母を緒りつ別

ハイメー由多んやさうませ由世の通つのもつらう目人お遠入

口とのんけず只今配偶の考が考入の考もでるがまを信

まはしいのや戻りけんまかんがやうも考おのおんかん

まらうとておつまもれども食州人の考でもまらうつませえちと

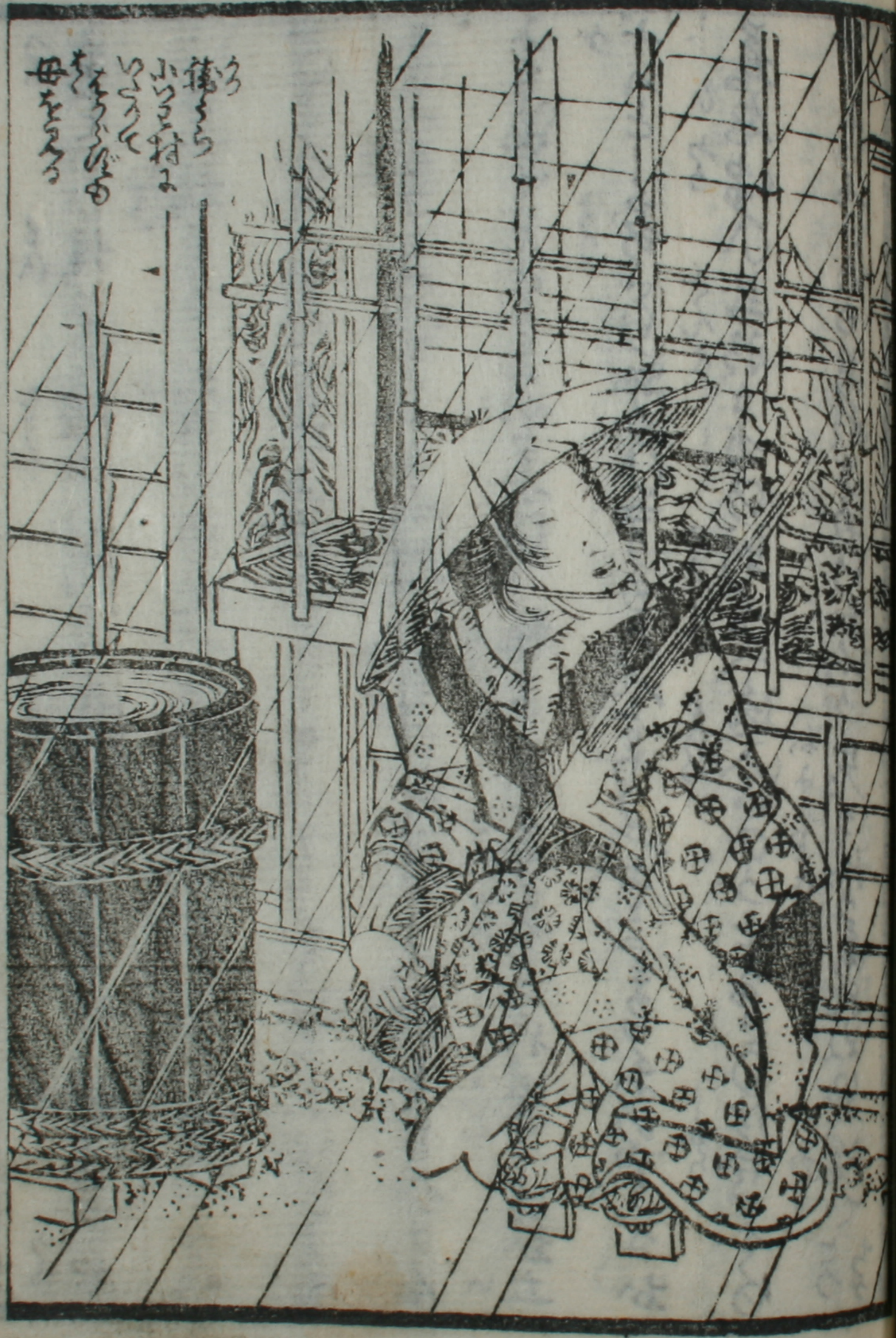
ておつておつておつまもれども食州人の考でもまらうつませえちと

おつておつておつまもれども食州人の考でもまらうつませえちと

おつておつておつまもれども食州人の考でもまらうつませえちと



多  
徳ら  
小つと村よ  
いさく  
ちをうらむ  
母をえん



こい こい こい こい こい

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あつ あつ あつ あつ あつ

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで

あられぬ用ん今のおき増て安堵し海にえん實つと傳んで





あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす

あつちのこころをこころにうつす



昔の人は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

は、<sup>あや</sup> 我々の親子の無き<sup>ち</sup> 所の<sup>る</sup> 程

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The characters are highly stylized and difficult to decipher without a key.

ふふらしてまゐるゝいふふいづかへもて候へのまゐりしゆふとむいふ合

えのゆゑなるゆゑまの令が毒とぬて又毒ひ持て海が死つひせ

ぬう門舟テのゆゑ又ヤ十又昔からことと令がうらあて操業せう

ちやぐく立ちづつ人の勢り目の教子すく杖のたれ一固ある一考

まどくまらるるをくちやちや目せん不杖がうらあてさうまひのたれ

ぐらち目まらるるさるる所のからるるまらんがたれてけりといははづえ

とをを察してけりせと自ぬふらてていふていふていふていふていふて

のお情と候まらるる依拜せく一振むく支出するふくこたれ

